

主 題：忠実な御国の民

聖書箇所：ピリピ人への手紙 1章27-30節

先ず、今日のテキストであるピリピ人への手紙1章を見ましょう。1：27-30を読みます。

「：27 ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、：28 また、どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。それは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。これは神から出たことです。：29 あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。：30 あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。」

命題 = 忠実な御国の民はキリストの福音にふさわしく特徴をあらわす生活をする

キリストの福音を信じて救われた聖徒は自分が信じることにふさわしく神に忠実に生きようとし、そして、忠実に生きる人にはその特徴がはっきりと現わされていきます。以前、ピリピ人への手紙1章19-20節を go っしょに学びましたが、そこでパウロは、自分の生きざまを通してキリストが崇められることを切望すると言いました。神の栄光を現わすために生きたパウロは、困難の中にあっても神への信頼を忘れず、キリストが崇められることを切望しました。「：20…生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。：21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」と言っています。神の栄光を現わす人生を歩んだパウロです。神の栄光を現わす生き方とは、私たちひとり一人が神の前に正しく生きることです。

その歩みについて、信仰生活について、パウロは27節で「キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」と説明しています。パウロのまさにその強い決意が27節の最初に出て来る「ただ」ということばに込められています。パウロは神に喜ばれる生き方をしたいと願って生きたのです。新改訳聖書第2版では

「ただ」、2017年版の新改訳聖書も「ただ」ですが、第3版は「ただ一つ」と訳されています。英語の聖書では「Only」です。パウロはここで原語のギリシャ語で「モノン」を使っています。「モノトーン」「モノカラー」などはよく聞くことばです。「ただ～だけ、これ以外にない、ただ一つだけ」という意味です。パウロはこのことばを文頭に置いて「たった一つ、これしかない」と強調してピリピの聖徒たちに伝えようとするのです。

文脈を見るなら、22-26節からパウロは投獄されていましたが、裁判の結果によっては死刑になってイエス・キリストとともに死ぬことになるかもしれません。生きていればピリピの聖徒たちと交わりをもつことができるかもしれないと記しています。つまり、パウロは「：20 それは私の切なる祈りと願いにかなっていません。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。：21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」と言ったのです。このような強い気持ちを込めてピリピの人たちに記したのです。これはパウロの初めての命令形のことばです。英語と同じように、ギリシャ語でも強調する動詞が最初に来ます。27節の文章では「生活しなさい」という動詞よりも「ただ」ということばを最初に持ってきて、次に続くことをピリピの聖徒たちに、また、私たちに伝えようとしたのです。

パウロがここで言わんとしていることは、私たち救われたクリスチャン、聖徒であるあなたも同じように神に喜ばれる生き方をしたいという願いをもっているはずだということです。もしかすると、自分には無理だ、できないと思っている方がおられるかもしれませんが、救われた者としてそのような願いをもつあなたに、是非、今日のパウロのメッセージを聞いていただきたいのです。なぜなら、パウロは神に忠実に生きること、ここで語られているパウロのことばを借りるなら「キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」という、この生き方こそが神が望んでおられること神に喜ばれる生き方であり、私たちが為すべき神からの命令であるからです。そして、神が私たちをそのように生かしてくださるのです。

パウロがこの27-30節で要約していることは「信仰者として信仰をもってどのように歩いていくのかというその大切な動機」と、また、「キリストの福音にふさわしく生きていく人を現わす三つの特徴的な生き方」です。初めに、聖徒が神に喜ばれる忠実な信仰生活を積極的にしたいと願う動機を見、次に、神に忠実に生きる聖徒に現わされる三つの特徴ある生活を見ていきましょう。

A. 聖徒が神に忠実に生きるその動機 27節

「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」と、パウロは信仰者が信仰者として生きていく動機を強調しています。

1. キリストの福音

福音は私たちが信じて救われたものです。Iコリント15：1からは皆さんがよくご存じのことが書かれています。「1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私あなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおり、三日目によみがえられたこと、5 また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです。」、私たちは間違いなく、この福音を信じて救われたのです。イエス・キリストは私たちの罪のために死んで三日目によみがえられた救い主である。私はこのイエス・キリストを主として従っていくと決心したことによって救われた、これが福音です。

また、パウロはこの福音についてローマ書1：16でこのように述べています。「16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と、私たちは確かにこの福音を聞きました。でも、注意が要ります。なぜなら、「信じるだけで救われるか？」とかつて議論がありました。聞いたことを自分のものとして信じて従っているかどうかは別のことだからです。ですから、パウロはこのように言っています。ローマ10：9、10「9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」。

イエス・キリストが真の神であり主であることを認め受け入れ、キリストの十字架の死と復活が自分の罪のためであると信じることによって罪が赦されて永遠のいのちをもつことができる、これが福音です。信じた者は心で信じるだけでなく信仰を告白して生きる者とされたのです。新しい人として生きるのです。

2. ふさわしく生活しなさい

ですから、パウロは次に「ふさわしく生活しなさい。」と命じるのです。「ふさわしく」とは「何かに値する、何かにふさわしく」と私たちが使うことばと同じです。（参照＝エペソ4：1「さて、主の四人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」、コロサイ1：10「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」） クリスマスは信じている福音と異なる生き方をすべきではありません。罪から離れて神に従い神に喜ばれ、イエス・キリストを主とする生き方をします。神の命令に忠実に従う聖徒にふさわしい生き方をしなさいと言っているのです。

さて、「生活しなさい」ということばを少し説明します。実は、27-30節は一つの文章です。その中に主なる動詞がこの「生活しなさい」なのです。パウロはピリピ教会の聖徒たちに分かり易い表現を使っていますが、私たちに余り馴染みがないのです。「生活しなさい」ということばはギリシヤ語の「ポリテューマイ」です。世界史で「ポリス」「ポリス国家」というギリシヤの都市国家のことを学びました。このことばは元々「市民となる」ことを意味します。そこから派生して「市民として生きる、市民として振舞う」ことを意味するのです。英語では「conduct」ということばです。

ですから、27-30節でパウロが言ったことは「市民としてふさわしく生活しなさい」ということです。聖書の欄外の脚注には「御国の民の生活をしてください」とある通りです。では、何の市民でしょうか？実は、同じようなことば「ポリテューマ」、「国籍」という意味ですが、ピリピ3：20で使われています。「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」、つまり、あなたがイエス・キリストを信じて救われた聖徒であるならば、あなたは天国民の一部、天国の市民だということです。イエスは言われました。マタイ5：3「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」と。私たちイエス・キリストを信じた者は天国の民なのです。ですから、パウロは「天国の市民として生きていきなさい」と言ったのです。

ここで、ピリピの町のことを説明します。使徒の働き16章を開けてください。パウロがなぜこのように「市民」に拘ったのかがよく分かります。この箇所は「ローマ市民権の特権と義務、植民都市ピリピ」のことが読み取れる箇所です。パウロとシラスが初めてピリピの町を訪問します。16：12には「それからピリピに行ったが、ここはマケドニアのこの地方第一の町で、植民都市であった。私たちはこの町に幾日か滞在した。」と書かれています。ピリピはローマの直轄地でした。ピリピという町の名はアレキサ

ンダー大王のお父さんのフィリップという名から付けられたことから、交通・商業の要所だったので。ですから、ここをローマの植民都市としたのです。この町の人たちはローマ人のように振舞うことをステータス（社会的地位、身分）としていました。

ピリピの町で起こった出来事が16：13から記されています。パウロとシラスはそこでルデヤのところに留まります。その後、彼らの伝道を妨げる者が現れました。いっしょに付いて来て邪魔をするのです。占いの霊に憑かれた若い女奴隷でした。困り果てたパウロは彼女からその占いの霊を追い出しました。そうするともうける望みがなくなった女の主人はパウロとシラスを訴えます。16：20-25には「：20 そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った。「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、：21 ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。：22 群衆もふたりに反対して立ったので、長官たちは、ふたりの着物をはいでむちで打つように命じ、：23 何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には厳重に番をするように命じた。：24 この命令を受けた看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。：25 真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」と書かれています。この後、地震が起こり、囚人が逃げたと思った看守は自殺しようとしています。28-32節「：28 そこでパウロは大声で、「自害してはいけません。私たちはみなここにいる」と叫んだ。：29 看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した。：30 そして、ふたりを外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。：31 ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。：32 そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った。」と、皆さんがよくご存じのところ。パウロとシラスが捕らえられてむち打たれた理由は何でしたか？21節に書かれています。ローマ市民に対して、してはならない風習を教え町をかき乱しているということでした。

さらに、牢から解放される時もローマ市民云々が問題になりました。16：35-39「：35 夜が明けると、長官たちは警吏たちを送って、「あの人たちを釈放せよ」と言わせた。：36 そこで看守は、この命令をパウロに伝えて、「長官たちが、あなたがたを釈放するようにと、使いをよこしました。どうぞ、ここを出て、ご無事に行ってください」と言った。：37 ところが、パウロは、警吏たちにこう言った。「彼らは、ローマ人である私たちを、取り調べもせずに公衆の前でむち打ち、牢に入れてしまいました。それなのに今になって、ひそかに私たちを送り出そうとするのですか。とんでもない。彼ら自身で出向いて来て、私たちを連れ出すべきです。」：38 警吏たちは、このことばを長官たちに報告した。すると長官たちは、ふたりがローマ人であると聞いて恐れ、：39 自分で出向いて来て、わびを言い、ふたりを外に出して、町から立ち去ってくれるように頼んだ。」と。パウロたちがローマ市民でありながら裁判なく罰を受けたことが問題となったのです。それほどまでに、ピリピの人たちはローマの市民権をもっていること、ローマ人としてどのように生きていくのかということにプライドをもっていたし、そのことを非常に大切にしていたのです。

ですから、パウロはこの手紙の中で、あなたがたはローマ市民であることを大切に思っているけれど、イエス・キリストが神であり救い主であることを受け入れたあなたがた聖徒は天国の民であり市民である、私たちの国籍は天にあるのだから、それにふさわしく生きなさいと言ったのです。ピリピ1：1には「キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから、ピリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、また監督と執事たちへ。」と書かれています。聖徒は救われた福音にふさわしい生き方をしなさいという命令を受けているのです。聖徒は信仰によって忠実に生きるのです。

パウロはなぜ27節で「福音にふさわしく」ではなく「キリストの福音にふさわしく」と言ったのでしょうか？パウロは私たち聖徒が信仰をもって生きていくその動機を強調し、そのことを教えるのです。パウロは自分の罪のためにイエス・キリストが十字架に架かり死んで三日目によみがえられたというその代価を忘れなかったのです。もう一度、1：20-21を見てください。「：20 それは私の切なる祈りと願いにかなっていません。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。：21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」と、パウロの人生のすべてはイエス・キリストなのです。彼は2：6-9でキリストのへりくだりについてこのように教えます。「：6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、：7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、：8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。：9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」と、パウロの心にあったのはイエス・キリストです。イエス・キリストがパウロの、また、私たちの罪の代価として鞭打たれ嘲られ、ローマ市民が架かることのないむごい死刑の方法である十字架に架けられて死なれました。そのことをパウロは決して忘れなかったのです。

先日、「パッション」という映画を見ました。イエス・キリストの受難の映画です。皆さんも十字架の光景を映画やいろいろなメディアを通して見られたと思います。それは今の私たちが目にするものではないでしょう。でも、ピリピの人たちにはこの「キリストの福音」という一言が伝わったのです。天

地万物の創造主である神が、私たちのような人として来られ、私たちの罪の贖いを為されたのです。私たちと神との関係は、このイエス・キリストの十字架の死と復活を信じる信仰によって与えられました。

パウロは「キリストの福音にふさわしく」と言いました。私たちは自分自身の行いではなく、神の恵みに

よって愛によって、信じる信仰によって救われました。それゆえに、私たちは神が与えてくださったイエス・キリストというとても大きくて大きい代価にふさわしい生き方をしたいと願うのです。その生き方が「忠実な御国の民としての生き方」です。パウロはこの命令をしたときに、自分自身のために与えられた代価を忘れなかったのです。聖徒が御国の民として忠実に生きる動機は、自分の罪のために為されたイエス・キリストの犠牲と愛です。

かつて、このすばらしい神のみわざを忘れた人たちを旧約聖書に見ることができます。モーセはイスラエルの民に、神がイスラエルの民に為された出エジプトの出来事と神の愛を決して忘れないようにと命じました。申命記 6 : 4 - 6 「:4 聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。:5 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。:6 私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。」と、そして、その後には繰り返して言ったことは「気をつけて、エジプトから連れ出してくださった神と神のみわざを忘れないようにしなさい。子どもたちにも神の偉大なみわざと愛のご配慮を伝えなさい」ということでした。しかし、イスラエルの民は神から離れました。

士師記 2 : 7 - 12 を見ると、「:7 民は、ヨシュアの生きている間、また、ヨシュアのあとまで生き残って【主】がイスラエルに行われたすべての大きなわざを見た長老たちの生きている間、【主】に仕えた。:8 【主】のしもべ、ヌンの子ヨシュアは百十歳で死んだ。:9 人々は彼を、エフライムの山地、ガアシユ山の北にある彼の相続の地境ティムナテ・ヘレスに葬った。:10 その同世代の者もみな、その先祖のもとに集められたが、彼らのあとに、【主】を知らず、また、主がイスラエルのためにされたわざも知らないほかの世代が起こった。:11 それで、イスラエル人は【主】の目の前に悪を行い、バアルに仕えた。:12 彼らは、エジプトの地から自分たちを連れ出した父祖の神、【主】を捨てて、ほかの神々、彼らの回りにいる国々の民の神々に従い、それらを拝み、【主】を怒らせた。」、民はヨシュアを初め、出エジプトの神のみわざを見た長老たちが生きている間は神から離れなかったが、その人たちの死後は神から離れバアルに仕えたとあります。滅びに向かう人間がみなしているように、神を神と思わず、感謝もせず、その思いは虚しいものに向いたのです。

私たち聖徒は決してイエス・キリストを忘れません。今日もこうして、神を礼拝し、私たちを救ってくださったイエス・キリストの救いを感謝するために集まっています。私たちはキリストから目を離さずに生きること、イエス・キリストの十字架によって現わされた神の愛とあわれみを覚えて感謝するのです。私たちが神を愛し、私たちのからだを神に受け入れられる聖い生きた供え物としておささげし、私たちの毎日を神に喜ばれる霊的な礼拝として神にささげるのです。そのような新しい人へと神は変え続けてくださっているのです。私たちが愛するイエス・キリストに似たものに変えていってくださるのです。

パウロはこの 27 節を通して、私たちが何をすることよりも、どんな心でするのか？どのような動機で毎日神の前を生きるのかということ強調したのです。私たちのその「動機」はイエス・キリストです。

B. 忠実に生きる生活 =証=

パウロは続けて、キリストの福音にふさわしく忠実に生きる聖徒はその特徴をはっきりと現わすということをお教えます。三つの特徴を見ていきましょう。

1. 信仰にしっかりと立つ 27 b 節

27 節の続き「…そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、」、「しっかりと立ち」ということばはギリシャ語で「ステーコー」で、元々は兵士に使われます。いのちを犠牲にすることがあったとしても自分の持ち場をしっかりと守る戦士、ここに使われることばです。このことばは I コリント 16 : 13 でも使われています。「目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。」と。これはある意味でパウロの遺言です。モーセがイスラエルの民に述べたことばです。申命記 31 : 6 「強くあれ。雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、【主】ご自身が、あなたとともに進まれるからだ。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」、また、神がヨシュアに言われたのも同じです。ヨシュア記 1 : 6 「強くあれ。雄々しくあれ。わたしが彼らに与えるとその先祖たちに誓った地を、あなたは、この

民に継がせなければならないからだ。」、ダビデが死ぬ直前にその子ソロモンに残したことばもこれです。Ⅰ歴代誌28：20「それから、ダビデはその子ソロモンに言った。「強く、雄々しく、事を成し遂げなさい。恐れてはならない。おののいてはならない。神である【主】、私の神が、あなたとともにおられるのだから——。主は、あなたを見放さず、あなたを見捨てず、【主】の宮の奉仕のすべての仕事を完成させてくださる。」、

そして、パウロがコリントの教会に残したことばが先に見たⅠコリント16：13です。聖歌や子ども讃美歌にもあります。「雄々しくあれ 強くあれ…、神さまのみ教えを守り行い 右にも曲がらず左にもそれず ただまっすぐに進むのだ、進むのだ」と。「信仰にしっかり立つ」とは、私たちが神のことばにしっかり立って、右にも左にも逸れずただ真直ぐ神に従って、私たちがみことばの人として生きることです。私たちの人生の一つ一つが神のことばによって裏打ちされるのです。

かつて、本当に信仰に立っているのか、神のみことばに立っているのか、誘惑があったときに明らかとなりました。勝利されたのはイエス・キリストです。彼が悪魔の誘惑を受けたとき、マタイ4：4「イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」と、神のことばにしっかり立って悪魔の誘惑に打ち勝たれたのです。失敗した人がいました。アダムです。彼は神のことばを知らなかったのでしょうか？心になかったのでしょうか？いいえ、彼はよく知っていました。「しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」（創世記2：17）という神の命令を知っていたのです。でも、蛇の誘惑でエバがそれを取って食べたときにそれを止めませんでした。かつ、妻のことばに聞き従って、その間違った選択によって神に対して罪を犯すことになるのです。なぜでしょう？信仰にしっかり立つことをしなかったのです。彼はみことばの人として神のことばに従うということがなかったのです。

私たちはどうでしょう？しっかりと神のことばに立つという特徴を現わしているのでしょうか？ヘブル4：12にはこのように書かれています。「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」と。信仰によって生きる者は神のことばにしっかりと立つ生き方をします。問題や判断の基準が神のことばによってなされます。神のみこころを知り、神のことばに忠実に生きるのです。私たちは毎日の生活において判断をします。いろいろな問題、それは人によって受験や進路、また、仕事かもしれません。また、結婚のこともかもしれません。家事、子育て、近所付き合いなど、私たちはその一つ一つに選択があります。神に忠実に生きる恵みの民として、神のみことばに従う選択ができていくのかどうか？ということです。神の喜ばれる選択をみことばを通して教えられ、探りながら選択していくのです。

パウロはここで「しっかり立つこと」について説明を加えています。「…あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして…」ということばです。ヘンドリクソン師の注解書によると、

- ・「霊」（プニューマ）： 神からの考えや物事を理解し判断する力
- ・「心」： 気持ちや欲求や感覚、意志を感じる部位

「霊を一つにして」とは、ピリピ教会の聖徒が神の教え、みことばを共有し、何が神のことばであるのか、みこころであるのかを考え、そして、判断し、一つとなって協力し合う姿、実現に向けて歩んでいる姿、それがパウロの言う「霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして…」ということなのです。そして、27節を見ると、パウロはそのことを「そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。」と言ったのです。パウロはこのとき投獄されていますから、ピリピの人たちに会えません。でも、そのようなピリピ教会の聖徒の姿を聞きたいと願ったのです。

このことは他の箇所でも見る事が出来ます。Ⅰテサロニケ1：2-10「:2 私たちは、いつもあなたがたすべてのために神に感謝し、祈りのときにあなたがたを覚え、:3 絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐を思い起こしています。:4 神に愛されている兄弟たち。あなたがたが神に選ばれた者であることは私たちが知っています。:5 なぜなら、私たちの福音があなたがたに伝えられたのは、ことばだけによったのではなく、力と聖霊と強い確信とによったからです。また、私たちがあなたがたのところで、あなたがたのために、どのようにふるまったかは、あなたがたが知っています。:6 あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちと主とにならう者になりました。:7 こうして、あなたがたは、マケドニヤとアカヤとのすべての信者の模範になったのです。:8 主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニヤとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているので、私たちは何も言わなくてよいほどです。:9 私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、:10 また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い

広めているのです。」、テサロニケ教会の人々の信仰がはっきりと証されて、マケドニア地方の模範となり、パウロはそのことを遠くにいながら伝え聞いたと言っているのです。パウロはピリピ教会の聖徒がキリストの福音にふさわしく生きることによって、しっかりと信仰に立ち、その姿を周りの人たちが「あの教会の人たちは神のことばが何であるのかを探り、確かめて、そのことばにしっかりと立って揺るぐことがない」と言っていることを聞きたいと願ったというパウロの願いを伝えているのです。聖徒がみな神に喜ばれることを求めてそのように行っているなら、神のみこころに忠実に生きていこうとするなら、結果として一つになる。そして、一人一人のクリスチャンが成長するだけでなく、教会そのものが成長していくのです。これが「信仰にしっかりと立つ」「霊を一つにして立つ」ということです。

2. 信仰のために奮闘する 27b節

二つ目の特徴は「福音の信仰のためにも奮闘する」ということです。ギリシャ語では「シユナスレオー」ということばで「ともに奮闘する」という意味です。この「信仰」ということばは「pistis、説得する」の派生語で「～について確信をもつ、物事について確信をもつ」という意味です。真理についての強い確信、信念と言えます。新約聖書では「人と神との関係についての確信、または、キリストが主であり神である確信をもつこと」です。実は、パウロがピリピ教会へ手紙を書いた理由の一つがここに見られるのです。なぜなら、偽りの教えを教会に持ち込む人たちが教会に影響を及ぼしていたからです。ピリピ3：2でパウロはこのように警告しています。「どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼の者に気をつけてください。」と。この時代、聖書はまだ完成していません。聖徒が神の前に正しく忠実に生きていこうと思ったなら、使徒たちから語られた神のことばにしっかりと留まり、信仰の戦いをしっかりと戦わなければ信仰を保つことができなかつたのです。私たちは間違った教えに惑わされることなくしっかりと信仰のために奮闘しなければ、忠実に生きることはできないのです。

「奮闘する」ということばは、パウロはピリピ4：3でも使っています。「ほんとうに、真の協力者よ。あなたにも頼みます。彼女たちを助けてやってください。この人たちは、いのちの書に名のしるされているクレメンスや、そのほかの私の同労者たちとともに、福音を広めることで私に協力して戦ったのです。」、つまり、私たちは信仰を持つだけでなく、周りの人たちにその信仰をはっきりと証して摩擦が起こったとしても、信仰の戦いを戦い続けて行くのです。ユダの手紙でもこのように学びました。1：3「愛する人々。私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして、あらゆる努力をしましたが、聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。」と。

パウロはここでまた一つのことばをもって説明しています。「心を一つにして」ということばです。パウロが期待したことは、ピリピ教会の聖徒が福音宣教のゆえに様々な迫害を経験するけれど、神に喜ばれることを願って、心を一つにしてともに奮闘している様子です。ともに協力し、励まし合いながら、福音宣教に励もうとしている姿です。その姿を周りの人々が見て話していることをパウロは聞きたいと願ったのです。福音の信仰に対する反対者に対しても聖徒は信仰の戦いに奮闘します。ピリピ1：28-30「:28 また、どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。それは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。これは神から出たことです。:29 あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。:30 あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。」

反対者に対しても「キリストの福音にふさわしく生活したい」と願う御国の民はその証を失いません。信仰によって忠実に生きる者は福音の信仰を守り伝えるのです。

3. 神に信頼する 28-30節

「:28 また、どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。それは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。これは神から出たことです。:29 あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。:30 あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。」

三つ目の特徴をまとめると「神に信頼する」ということです。

・驚かされることはない : 28節で「反対者たちに驚かされることはない。」ありますが、「驚かされる」（ギリシャ語でプテュロー）ということばは新約聖書でこの一箇所だけです。これは単に「恐れる」という意味ではありません。2017年版の新改訳聖書では「脅かされる」と訳されていますが、少し意味合いが違ふと思います。なぜなら、このことばはジョン・マッカーサー師の注解書によると「馬」のことに触れているのです。「ほとんどの場合に無害な出来事にびっくりして、乗っている人を投げ出して脱走する馬の様子をあらわす」と記されています。

・**救いのしるし** : これはどういうことでしょうか？この当時は迫害がありました。パウロとシラスも捕らえられて鞭打たれました。あるクリスチャンたちは死に至りました。実際、初代教会のクリスチャンたちがどんな迫害を受けたかは私たちは歴史で知っています。そのような反対者の「どんなことがあっても、」とパウロは言います。つまり、信仰によって神に信頼して忠実に生きる聖徒は自分の信仰を投げ出すことはない、背教者となることはないということです。そのことが、神からのしるしとして明らかにされるとパウロは言うのです。28-29節を見ると、そのことが聖徒にとっては「救いのしるし」だと言われています。「救いのしるし」とは、聖徒には救われていることが真実であると明らかになるということです。

・**滅びのしるし** : そして、もう一つは「滅びのしるし」です。反対者にはさばきがあるのです。Ⅱテサロニケ1:4-9に「:4 それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。:5 このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであって、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。:6 つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、:7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります。:8 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。:9 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」とあります。

・**迫害についての教え** : 福音宣教をするなら、必ず、それを快く思わない反対者が現れます。その中で神に信頼し、神に喜ばれることを選択し、忠実に従うことがキリストの福音にふさわしく生きる忠実な御国の民の生活です。迫害があっても意気消沈するのではなく、私たちには家族があり、神の家族である兄弟姉妹がいますから、励まし合いながら、神が「せよ！」と言われることを忠実に実現できるように励んでいきます。迫害が伴おうと困難が伴おうと、神に忠実に生きる姿です。

ですから、29節でパウロは、聖徒は神から救いをいただくだけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったと説明しています。「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」と。私たちは救いだけでなく、イエス・キリストが神であり救い主であることを証する機会をも神からプレゼントとして賜っているということをパウロは述べているのです。

イエス・キリストご自身は迫害や苦しみを受けられました。山上の説教の中でこのように言われました。マタイ5:10-12「:10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。:11 わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。:12 喜びなさい。喜びおどりなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。」と。

・**パウロとシラスの態度** : パウロはピリピ1:30で「あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。」と言っています。パウロとシラスは先に見たようにピリピの町で鞭打たれ投獄されました。何も悪いことをしていないのに、キリストのゆえに迫害を受けたのです。使徒の働き16:19-40に書かれています。「私について先に見たこと、」はそのときのことで、そして、「私についていま聞いているのと同じ戦い」とは、投獄されていたパウロのためにピリピ教会の人たちは祈っていました。エパフロデストを遣わしてパウロに贈り物をしました。パウロはその同じ戦いをピリピ教会の聖徒たちも経験していると言ったのです。

・**同じ戦い** : これは「アゴーン」、英語では「agony」で「もだえ苦しむ」という意味です。このように聖徒には確かに「苦しい戦い」があると言うのです。Ⅱテモテ3:12に「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と書かれている通りです。イエスもこのように言われました。ヨハネ16:33「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」と。

聖徒は「キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」と、救いを証する機会を神から与えられているということです。私たちはいろいろな苦しみを経験するかもしれませんが、今、私たちは鞭打ちや投獄によって死を経験することはないかもしれませんが、日々の信仰生活において様々な戦いや苦しみがあるかもしれません。人に分かってもらえない苦しみがあるかもしれません。でも、その一つ一つが、イエス・キリストが神であり私たちの救い主、主であることを証する機会として神から与えられているのです。聖徒はたとえどのような苦しみに遭うとしても、主に信頼して、信仰を投げ出すことはしません。いつも私たちは、自分の信仰生活の中に「神さまが確かに救ってくださった」という神からのしるしを見るのです。ですから、どのような苦しみが起

こつても主に信頼して信仰を投げ出しません。なぜなら、苦しみや困難の中にあっても、神の力と助け、神の臨在が聖徒とともにあるからです。

ヨシュアに「雄々しくあれ、強くあれ」と言われた神がともにいてくださるように、イエス・キリストが「わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」（マタイ28：20）と言われたように、私たちは神の約束に立つのです。どこか遠くにおられる神ではありません。神はIコリント10：13にあるように、私たちのことをよく知っていてくださる方であり、私たちの弱さに同情できない方ではないのです。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」と。試練の中でも神がすべてのことをご御存じであり、私たちは神の御手の中にあることを知っています。そして、御子をさえ惜しまず与えてくださった神のご配慮と愛を思い起こすのです。ローマ8：28、32「：28 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」「：32 私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」

今日のテキストであるピリピ1章に戻って、私たちはパウロから「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」ということばを受けました。そして、この命令に歩む者は「霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、…奮闘し」、かつ、神を信頼して自分の信仰を投げ出すことをしないのです。このような特徴をはっきりと周りの世の人たちに現わす信仰生活をするのです。

でも、私たちはどうでしょう。実は「生活しなさい」ということばの前に「キリストの福音にふさわしく」ということばが躍り出るので、パウロが言いたかったこと、それは、私たち御国の民は「キリストの福音にふさわしく生きること」が、私たちが忠実に生きることの動機となるということです。天秤のことを話しましょう。両方の重さを測る天秤です。一方にあるのは「私たちの救い」です。神である方が人として来られ、苦しみを受けられ、十字架の死をも受けてくださって、今、私たちとともにいて励まし、助け、執り成しの祈りを為してくださっています。これが「キリストの福音」です。

私たちはそれにふさわしく忠実な御国の民として毎日量るのです。毎日の様々な問題の中にあつて神のことばに従うかどうか、忠実に生きるかどうかを天秤にかけるのです。私たちはどうでしょう？今まで「キリストの福音にふさわしく」生きて来たでしょうか？神からのしるしを毎日の自分の信仰生活の中に見ているのでしょうか？忠実な御国の民として生きる者は、信仰にしっかりと立ち、信仰の戦いのために奮闘し、神に信頼して生きます。あなたはいかがですか？

「キリストの福音にふさわしく忠実な天国の民として生きていきたい」と、皆さんご自身で決心なさいませんか？そのように決心なされることをお勧めします。私たちはキリストの愛と恵みに感謝しつつ、神の助けと力を日々いただいてキリストの福音にふさわしく生きていくのです。

ぜひ、たった一つ「キリストの福音にふさわしく」、忠実な御国の民として生きていきましょう。

参照 = ローマ12：1-2「：1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。：2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえるために、心の一新によって自分を変えなさい。」、ヘブル12：1-3「：1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。：2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。：3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。」